「アヴェ・マリアのヴァイオリン」を読んで

W校高等部一年　三井寛子

読書をしていて、このような体験をしたのは初めてだった。鳥肌が立ち。今にも涙があふれ出てきそうな気持ちになったのだ。

戦争は常に人に苦しみしか与えることはなかった。今までの私はずっとそう思っていた。しかし、この本を読んでから私にはこうも思えるようになった。人々をどん底まで苦しめた戦争という歴史があるからこそ、今こうして私たちは平和で幸せな生活を送れているのではないのだろうかと。そして、そのすべてを教えてくれたのがこの物語に登場する一つのヴァイオリンだった。

私にはなぜあんなことが起こったのかいくら考えてもわからない。同じ人間でありながら、信じていることが少し違うだけで、どうしてあの様な苛酷な生活を強いられ、送らねばならなかったのか。家族と離され、毎日殺されていく仲間を見ながら朝から晩まで働かされ、生きるか死ぬかの瀬戸際に立たされていたユダヤ人。きっと、私たちが想像している何十倍、何百倍もの苦しみや恐怖、そして不安と闘いながら生きていたはずだ。そのような環境の中で生きた彼らこそが本当の意味での生きるということを唯一理解できている人々なのではないかと私は思う。

この物語に登場するヴァイオリンの持ち主はユダヤ人の少女ハンナだった。ナチスのユダヤ人迫害により強制収容所に連れていかれた彼女は、ヴァイオリンという武器を持っていただけに殺されずには済んだものの、家族を失い、他の強制収容所に連れて行かれたユダヤ人たちからは軽蔑されながら地獄の様な日々を過ごした。途中で心が折れそうになりながらも、めげずにたくましく生き抜いたのだ。ヴァイオリンに残っているハンナが流した涙の跡からは、子供ながらに悩み、沢山の不安を抱えていたことが、痛いほど伝わってきた。

そしてそれは、家族の分も生きなければという思いを持ちながら毎日を一生懸命生きたハンナの生の証でもある。

私たちが今、学校の歴史の授業でこのような過去を教わるのには、二度と同じことを繰り返してはいけないというメッセージが込められているからであろう。

それは、ドイツでも同じだ。この時代に生きたドイツ国民も、心の奥では絶対にこの行為を心から正しいと思ったことなどないはずだ。同じ人間なのだから、たとえ悪心があったとしても良心もあったに違いない。だから、彼らはこれから国を支えていく子供たちにナチスの行為がどれだけ悲惨で人々を苦しめたのかをしっかりと教え込んでいるのだ。

私たちは、何人もの犠牲者を出しながら歴史に刻まれたこの出来事をひと時も忘れてはならない。そして、このようなことが二度と起こらない社会を作っていくのが使命なのである。ハンナのヴァイオリンが受け継がれて来たのもハンナが次の世代へ伝えたい思いがあったからなのだと思う。

補習校という名の養分

LI校　高等部二年一組　柴田　奈央美

自分自身とは何だろう。今年卒業してしまう私の頭にそんな疑問が横切る。自分の個性とは何だろうか。他とはどう違うのか。近々この難題に頭を抱える。こんな平凡な私に自分だけの何かはあるのだろうか、と。問う度に迷路に迷い込んだかのような不安感に苛まれる。そんなある日、授業でそういったものは、周りの環境などに影響されるらしいということを学んだ。その定義を元に考えてみると、自分の場合、「現地校」「家族」「友達」という単語が思い浮かぶ。そして「補習校」。特にこの「補習校」は私自身に大きな影響を与えている、そしてこれなしでは自分を語ることはできないだろう。

何故自分がこんなにも補習校に思い入れているのだろう。当初は親に「行け。」と言われて無理矢理、通ってきたようなものだった。友達はみんな土曜日は休みなのに、何故私だけこんなところに来なければいけないのか。現地校だけで手がいっぱいなのに・・。かつての私はそう思い、毎週通学するのがとても苦痛だった。しかし、今となっては自分が最も落ち着く場になったのである。

補習校というものがかけがえのない場になった一因は、学校の友達であった。自分の学年は少人数であるため、毎年、クラス替えは特に無く、馴染みの面子で過ごす年を重ねてきた。それがためか、クラスのみんなとは気の置けない兄弟姉妹のような関係になった。困ったときには相談に乗ってくれたり、くだらないことで盛り上がった。そして頼りになる先生たちも加えて、此処は自分にとって単なる学校ではなくなった。いつの間にか、第二の家庭のようになっていたのだ。

そして生徒会。これらは私自身が成長することになった活動だった。中高等部に上がり、初めて高学年としての責任などを自覚した。運動会のボランティアや球技大会などの学校行事でこういった事に励むことで、物事を成し遂げる喜びというものを知り、ほんの少しずつであったが、引っ込み思案だった自分の殻から出てこれたように思う。

真の「自分らしさ」とは何なのだろうか。何を掴めば「自分らしく」て、何をどうすれば「自分らしい」のだろう。まだ良く分からない。でも、これだけははっきりしている。補習校に通ってきたからこそ今の私がある。補習校に通っているからこそ、少しずつ変わってきた自分がいる。もし、「自分」を花に例えるなら、私は咲きかけの「蕾」だろう。そしてその蕾は、植えられた鉢の中で土や水から運ばれた養分を糧にしてきた。「補習校」は私という花を咲かせるための「養分」だった。まだ、「蕾」つまり「自分の個性」は完全に花開いていないけれど、きっといつか「養分」＝「補習校」を完全に吸いきったときに花開くと信じている。

わたしのすきなくつ

L一校　一年一くみ

なんば　咲花

きょねんのはる、わたしのパパが日本のデパートで、サンダルをかってくれました。ヒールがたかくって、大人の女の人みたいだったからほしくなりました。それをはくとせがたかくなるからです。

いろはピンクでおはなが

12×12

おかあさんのスクーター

クワコウ　ますみ

おかあさんのスクーターは、青くて、でっかいです。大人のサイズだからです。ぼくも同じメーカーの子どもようスクーターをもっているけれど、ちょっとこわれてしまいました。だからこのごろ、ぼくとおかあさんは、いっしょに青いスクーターにのっています。

12×12

いっぱいついていて、ヒールがすごくかわいいです。

なつははけますが、ふゆははけません。なので、ふゆのときは、すごくざんねんです。

きょねんとことしにいっぱいはいたのでぼろぼろですが、わたしはこのサンダルがーばんすきです。らいねんもいっぱいはきたいです。

12×12

いっしょにのるとき、おかあさんがうしろからついてくれるので、ぼくは、じゆうな気もちになります。

先週、二人でスクーターにのって、こうえんにむかっていたら、中国人のじてん車にのっているおじさんに、ぶつかりそうになりました。おかあさんは、ブレーキをかけました。

おじさんは、中国でお

12×12

かあさんに、大ごえでおこっていました。おかあさんのかおが、赤くなっていました。

その日から、ぼくとおかあさんは、もっと気をつけて、スクーターにのるようにしています。

ぼくは、まだならいたいことがいっぱいあります。それは、えいごです。アメリカ人ともあそべるようになりたいです。

アメリカにきてから、だんだんうれしくなっています。あたらしいおともだちがふえているからです。

こんどのなつ休みに、日本に一どかえります。日本にいくのも、たのしみです。

12×12

「アメリカにきてから。」

W校一ねん一くみ

小いけほたか

ぼくは、はじめてアメリカにきたとき、えいごがわかりませんでした。はじめてのげんち校に、なれませんでした。サマーキャンプにも、なれませんでした。

もう一ねんたったから、えいごもわかります。もうげんち校にもなれました。

12×12

日本のおともだちにあえるからです。でも、日本にいるときもかなしいです。アメリカのおともだちからはなれるからです。

いき、アメリカのおともだちがふえていくのがたのしみです。ぼくは、えいごの本もすきになりました。

12×12

わたしのともだち

W校　一年一くみ

いとう　あゆみ

わたしには、おも白いともだちがいます。わたしは、そのともだちとあそぶのが、大すきです。どうしてかというと、みんなおも白くて、やさしいからです。

あそんでいて、おかあさんが、「かえるよ」。

というと、わたしは、「いやだ」。

といいます。でも、おこられるから、ちゃんとかえります。

一人のともだちは、おも白いことをいうともだちです。だからわたしは、わらいます。

もう一人のともだちは、いえが目のまえです。年上で、おとなっぽいです。じ

てん車にのって、あそんだりします。

もう一人のともだちも、いえが目のまえで、わたしを見つけると、わたしにとびこんできます。やさしくて、かぞくごっこであそぶのがすきです。わたしも、かぞくごっこが、大すきです。

ともだちとあそぶのは、たのしいです。わたしは、

もっとともだちをつくりたいです。

アメリカでの僕

Wこう　一ねん二くみ

今堀　勇太

ぼくのかぞくは、二月八日にアメリカへきました。ゆきがたくさんふっていて、びっくりしました。

ぼくは、お父さんにあえてうれしかったです。なぜなら、すこしのあいだ日本とアメリカで、わかれてすんでいて、さびしかったからです。でも、たきの水しぶきがすごくて、たのしかったです。カナダのりょうりもおいしかったです。

そして、かじゅえんにもいきました。たくさんりんごのしゅるいがありました。

もわかります。

なつやすみには、ナイアガラのたきにいきました。いくとちゅうでくるまによって、つらくてかなしかったです。でも、たきの水しぶきがすごくて、たのしかったです。カナダのりょうりもおいしかったです。

そして、かじゅえんにもいきました。たくさんりんごのしゅるいがありました。

12×12

げんちこうにいきはじめて、さいしょは一人ぼっちでさびしかったけれど、ともだちができてたのしくなりました。おにごっこをして、なかよくなったからです。

そしてさいしょは、えいごがわからなかったけれど、だんだんわかるようになって、今はせんせいのはなしらです。

その中で一ばんすきだったのは、日本のりんごのフジです。あまくておいしかったからです。

これからは、やきゅうがうまくなりたいです。なぜなら、ヤンキースの田中せんしゅがだいすきだからです。田中せんしゅのように、つよくなりたいです。

また、アメリカにきてチエスをおぼえました。お父

12×12

さんと、たいせんしして、ぼくがかちました。もっとつよくなって、チェスのせんしゅをめざします。

これがアメリカでの僕のゆめです。

12×12

りんごくん、まってね。

きょうぼくはりんごがりにいきました。こうそくどうろをおりるとたくさんのくるまがならんでいました。

こんなところでどうしたんだろうとおもっていると、それはぜんぶりんごがりにいく人たちでした。たくさんならんでいる人たちを見ると、ぼくもはやくりんごをとりにいきたくなりました。りんごえんについて、りんごのあるおかにいくと、ぼくの手がとどきそうなところのりんごはぜんぶなくなっていました。ぼくがおさるのジョージだったら木にのぼってとれたのになとおもいました。ぼくは、おとうさんがりんごがりばうでおとしてくれたりんごを一しょうけんめいひろって80こもとれました。おかあさんといっしょうにジャムにしてたべるのがたのしみです。

12×12